

日本国際経済学会関西支部研究会 2005年3月19日

「IMFの貧困削減アプローチ(PRGF)に関する一考察 : 国際収支と成長の観点から」

報告者: 大野敦 京都大学大学院

はじめに

【発表の流れ】

貧困と開発を巡る状況について

PRGFの実体

PRGFにおける構造調整政策

IMFの成長論とコンディショナリティ

Thirlwallの法則から何が言えるのか?

結論

略語

ESAF 拡大構造調整基金 Enhanced Structural Adjustment Facility

HIPC 重債務貧困国 Heavily Indebted Poor Countries

IMF 国際通貨基金 International Monetary Funds

PRGF 貧困削減成長ファシリティ Poverty Reduction and Growth Facility

PRSP 貧困削減戦略書 poverty reduction strategy papers

MDGs ミレニアム開発目標 Millennium Development Goals

UNCTAD 国連貿易開発会議 United Nations Conference on Trade and Development

【要旨】

近年、貧困に焦点を当てた世界銀行の PRSP アプローチが開発の主流と化しつつある中で、IMF は 1999 年に ESAF を PRGF へと発展させた。PRGF は、貧困・財政の柔軟性・透明性・被援助国の自主性に配慮を行った新しいアプローチとして変化が強調されているが、IMF の専門領域であるマクロ経済政策という意味では、古くからの構造調整を引き継いでおり、対象国の現状と合っていない。本報告では、需要を主因とした国際収支制約の存在を論じる Thirlwall の法則を用いて、対象国に必要な国際政策支援の枠組みを提示する。

【報告のメッセージ】

PRGF の核となる部分が構造調整を引き継いでいるので、貧困対策には補完的でない根本的な変革が必要である。

【先行研究との位置づけ】

PRGF(少ない) 日本では白井(2003)、欧米では IMF の Review 肯定的
PRSP(多い) 石川(2002)や大野健一(2002) PRSP は broad-based growth と pro-poor target の二段階アプローチでその最適点を探るべき 中立的

1、貧困と開発を巡る現状

・ MDG s が開発の issue 化 貧困が開発の目標として再度出てきた。
2015 年までに世界の貧困人口を半減させるという具体的な数値目標の設定

・ MDG s に対応して IMF や世界銀行が用意したプログラム
PRSP(世界銀行)、PRGF(IMF)、HIPC
PRSP が開発のメインロードとして存在感を増しつつある。
・ PRSP を画期的な新アプローチとして見る見方(IMF 2002)
・ 方法論としての整合性の脆さを指摘する見方(石川 2003)

・ IMF は PRSP 体制に於いてどのような役割を担っているか
マクロ経済政策に特化
これまでの拡大路線から、「核となる専門領域」への集中

・ PRSP 体制では、世界銀行と IMF の協働が進み、棲み分けが存在する。

PRSP	世界銀行	ミクロ
PRGF	IMF	マクロ

PRSP/PRGF がブレトンウッズ機関内部からの構造調整融資批判にかなり配慮した政策であることを示す

2、PRGF の具体的な役割について

・ ESAF から PRGF へと変貌
1980/90 年代に構造調整融資への内外からの批判を受けて
IMF は「透明性・市民社会参加・オーナーシップ・貧困対策」が改善されたと主張する。
「貧困と成長」¹に配慮を行ったマクロ経済政策への転換

¹ ESAF ではこの目標が「安定と成長」であった。

【ESAF への批判と IMF の対応】

「安定と成長」に寄せられた批判	「貧困と成長」の PRGF の改善点
画一的で教条主義的	変化に柔軟性をもたらした
不明瞭な効果	政策の影響評価を行う
多大なコンディショナリティ	核となる領域のみとなり減少
被援助国オーナーシップの無視	参加型プロセス
貧困層無視	貧困層への支出を可能とする

・マクロ政策の実施概要

PRGF においては、貧困削減と成長を意図した主要政策と構造改革は、PRSP のプロセスの中で決められ、優先順位をつけられ、予算が建てられる。さらに、PRGF プログラムにおける財政上の目標は、その国の状況や貧困支援政策の変化に柔軟に呼応すると同時に、PRGF プログラムは、とりわけ公的資源の管理、透明性、説明責任の改善に着目した、ガバナンスの強化に力を注いでいる。PRGF プログラムはまた、貧困および主要なマクロ経済政策の社会的影響に一層注目をしている。

・IMF の領域

「健全なマクロ経済政策や為替レート・税制等関連分野での構造改革、財政運営の改善、予算の実行、財政の透明性、租税・関税の管理などに対するアドバイス」

IMF の専門領域への特化

IMF の PRSP 体制における役割は、PRSP のマクロ経済政策を担当し、その過程で、透明性やオーナーシップを高めることにある。

3、PRGF における変化の分析

【実際の PRGF】

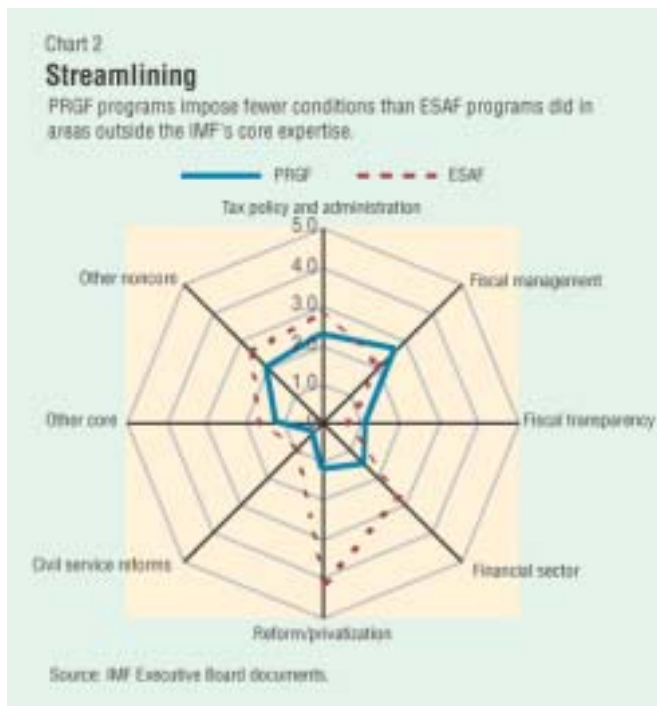
分野	実際
構造調整	世界銀行(PRSP)と HIPC で役割分担を行った つまりコアなマクロ経済政策は構造調整政策とほとんど変わっていない
参加型プロセス	市民社会にジレンマをもたらしているさらに、開発メニューの改善効果はあるが実際の効果には疑問符
貧困支出の実態	IMF が言うように、増えているのかは統計的にわからない
政策の影響評価	IMF 自身のレビューでも改善の余地ありとされる
オーナーシップ	途上国政府の実行能力向上(Capacity building)の必要性

- ・ PRGF は制度としてまだまだ発展途上
実証的にはまだ詳細を検討する段階ではない

4 , IMF の成長論とコンディショナリティ

PRSP/PRGF 構造調整融資に変わる新しい開発政策としばしば言われる

- ・ 分析する際の視角
Conditionality がどのように変化したのか？
IMF はどのような貧困削減哲学を持っているのか？
- ・ 構造調整融資²におけるコンディショナリティの変化³
IMF(2003) コンディショナリティは大幅に減少している(図 1)



[出所]IMF(2002)Chart2 より

²構造調整自体には、世銀内部からも批判が多かった。世銀エコノミストの Easterly(2005)によると、援助国側の政策的志向がかなり強いことが定量的に示されている。

³国際金融機関である、IMF が条件付き融資を行うのはある意味当然の権利ではあるが、その内容や過去の効果の検討はその修正を迫る際に非常に重要な役割を占める。

減少が見られるものは世界銀行や HIPC のマンドート化、減少が見られないものはマクロ経済政策に関わるもの

・ IMF の専門領域は、依然としてマクロ経済の安定を目指す経済政策のセット

実施要項では、IMF は構造調整政策で聞き慣れた言葉を繰り返す

「IMF は、安定的なマクロ経済政策、自由でより開かれた市場、そして安定的で信頼性の高い私的部門の活動のための環境をサポートする政策を支持し、助言を行いつづける。⁴」

IMF の安定化政策の主な目標は国際収支の改善にある。そのために、IMF の安定化政策には緊縮財政、金融引き締め、インフレ抑制、非対称的な所得政策、通貨切り下げ、物価・貿易・金融等の自由化、などが盛り込まれる。

・ IMF の成長論

Pro-poor Growth 論が人口に膾炙しているが IMF における Pro-poor Growth 論は？

IMF は Pro-poor 政策と Pro-growth 政策を分けており、Pro-poor Growth は用いず

PRGF の成長論は構造調整の成長論⁵を引き継いでいる

構造調整の成長論は、短期的な均衡を重視する政策

国内市場が縮小し、貧困層に大きな打撃となる

貧困対策はコンディショナリティのどこにも出てこず、あくまでも副次的な要素

Pro-poor Growth 実態や IMF が考えているモデルは、相変わらず短期的な国際収支を改善して、成長のために市場をどのように安定させるかに注意をおいている。

つまり、IMF の哲学は、安定 成長 貧困削減⁶である。⁷

⁴ The Poverty Reduction and Growth Facility (PRGF) – Operational Issues – P3 Policy Development and Review Department IMF, December 13 1999

⁵ 構造調整における成長論の詳しいモデル展開は、Taylor(1991)を参照のこと。なお日本語文献ならば、佐野(2004)など。

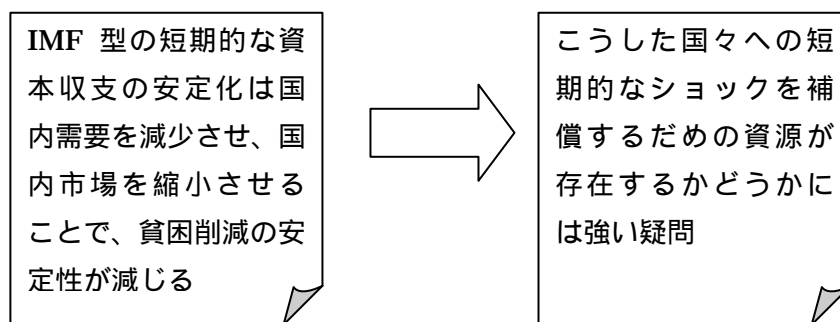
⁶石川(2003)は 2 段階アプローチ論から、PRSP においても同様の構図を指摘する。ただし、この 2 者の間での最適なアプローチを考察するべきであるという結論に達しており、根本的な変革が必要であるとする論者とは立場を異にする。

⁷ 世界銀行の「成長 貧困削減」へと向かう経路に関しては、Dollar and Kray(2002)を、また IMF に関しては、A. Krueger(2003)を参照のこと。また、貿易と成長や貧困に関するサーベイは大野敦(2004)を参照されたい。

国内市場がある程度完備されていて、国内資源が十分にある国においてならば、IMF 型の国際収支均衡を重視した、短期的な国内市場縮小政策で、資源の効率的な使用を促すことは可能であろう。

貧困が国民の半分以上をしめ、公的サービスの枠や受益者も非常に少ない環境で、量・質ともに低い国々で、市場経済が単純に機能するのかという大野健一(2001)の批判は否定することができない

PRGF の対象となるような国の多くでは、貧困が全人口の半分以上に蔓延している「低所得国」であり、そもそも国内資源が希少である。例えばサブサハラ以南の国々への資本投資は世界全体の 2%にも満たない。多くの国では、国際収支を民間資本ではなく、IMF や世界銀行、そして 2ヶ国間援助などの公的融資により維持している。



PRGF は、構造調整と変わらず、社会的な顔を持った構造調整である。

・ IMF 路線に代わる代替案はあるのか？

国内市場を縮小せずに国際収支を維持し成長するには Thirlwall の国際収支制約成長論

5、Thirlwall の法則から何が言えるのか？

Thirlwall の法則によると、国際収支は成長に対して制約条件として働き、安定的な成長のためには安定した国際収支を持続させなければならない⁸。基本モデルは以下の展開となる⁹。

⁸ Thirlwall の法則のサーベイについては Thirlwall(1997)参照。Thirlwall 理論は、90 年代後半から再度脚光を浴びている。Thirlwall(1997)以降の流れをサーベイした論文はないが、資本を入れたモデル 技術進歩を入れたモデル 貿易体制に関する実証という大きな流れに分けることができる。

⁹ 本稿の表記方法は、Thirlwall(2002)に従って記述している。Thirlwall の方程式は、他に

$$P_d X = P_f ME \quad (1.1)$$

変化率を小文字で取ると、

$$p_d + x = p_f + m + e \quad (1.2)$$

となる。さらに輸出需要関数と輸入需要関数を特定すると以下のようなになる。

$$X = A(P_d/P_f E)^\eta Z^\varepsilon \quad (1.3) \quad : \text{輸出需要関数}$$

$$M = B(P_f E/P_d)^\psi Y^\pi \quad (1.4) \quad : \text{輸入需要関数}$$

それぞれの変化率を取ると、

$$x = \eta(p_d - p_f - e) + \varepsilon z \quad (1.5) \quad : \text{輸出成長率}$$

$$m = \psi(p_f + e - p_d) + \pi y \quad (1.6) \quad : \text{輸入成長率}$$

(1.5)と(1.6)を(1.2)に代入すると、国際収支均衡と整合的な所得成長率 y_B が得られる。

$$y_B = [(1 + \eta + \psi)(p_d - p_f - e) + \varepsilon z] / \pi \quad (1.7)$$

ここで、相対価格が不変であると仮定すると、

$$y_B = (\varepsilon z) / \pi = x / \pi \quad (1.8) \quad \text{Thirlwall の法則}^{10}.$$

ある国が国際収支赤字に陥ることなく成長し続けることが可能となる成長率は、(1.8)式に示されているように、世界の経済成長と、輸出および輸入に関する需要の所得弾力性¹¹に等しい。次に国際資本流入を入れたモデルを考える。

$$P_d X + C = P_f ME \quad (2.1)$$

という経常収支均衡のもとに、基本モデルと同様の展開を行うと、以下の式が導き出され、

も Thirlwall(1997)の表記方法があり、式の符号が変化するので注意が必要である。また、本稿の式ではマーシャル・ラーナーの符号条件に絶対値が付与される。

¹⁰ Thirlwall の法則は Harrod 貿易乗数の動学版でもある。Thirlwall の法則は、短期なのか長期なのかの判別がつかない、供給サイドを全く無視している、長期的な交易条件一定を根拠としているという点でしばしば、批判される。本稿では、これらの問題にはふれず、貧困に対するインプリケーションに集中する。この点に関しては今後の課題とする。

¹¹ 国際収支均衡成長率 y_B は、で計られるこの国の輸入にたいする欲求や嗜好と逆の関係にある。このことは、輸出のみではなく輸入も国際収支の制約条件となることを示している。

国際資本流入を入れた場合の国際収支均衡と整合的な所得成長率 y_{BT} が得られる。

$$y_{BT} = \left[(p_d - p_f - e) + (\theta\eta + \psi)(p_d - p_f - e) + \theta\varepsilon z + (1 - \theta)(c - p_d) \right] / \pi \quad (2.2)$$

ここで $\theta = \frac{P_d X}{P_d X + C}$ は輸入支払いのために必要な受取合計に占める輸出のシェアとなり、 $1 - \theta$ は資本流入のシェアとなる。

P_d : 自国通貨建ての輸出価格、 X : 輸出量、 P_f : 外国通貨建ての輸入価格量、 M : 輸入量、
 E : 自国通貨建ての為替レート、 Z : その他世界全体の所得、 η : 輸出需要の価格弾力性 ($\eta < 0$)、
 ε : 輸出需要の所得弾力性 ($\varepsilon > 0$)、 ψ : 輸入需要の価格弾力性 ($\psi < 0$)、 Y : 国内所得、
 π : 輸入需要の所得弾力性 ($\pi > 0$)、 $C (> 0)$: 国際資本流入

(2.2)式の右辺は4つの項に分けて考えることができる。まず第一項は、実質所得成長に対する純交易条件効果である。次に第二項は相対価格変化の量的効果、第三項は外国の所得成長による外生変化の効果、第四項は実質資本流入の成長に対する効果である。

・ (1.8)式や(2.2)式は互いの国が相互依存関係にあることを示す

ある国の成長率は世界の成長率にリンクしている

どのようにしてある国はその他の国よりも国際収支を維持しながら、早く成長することができるのか？

Thirlwall(2002)は、輸出需要 ε が3~4の値をとる国は急速に成長し、1前後の値をとる国の成長率は低いと指摘

つまり、成長の鍵は輸出¹²

Davidson(1994)は、世界の需要が各国に均等に配分されないことを示唆

安定した成長を確保するには、どのように需要制約を解決できるかが問題

¹² Thirlwallによると、開放経済にあっては貯蓄 = 投資のギャップを橋渡しするよりも、輸出 = 輸入ギャップを埋めるほうがよりいっそう困難である。それゆえ、輸出需要の所得弾力性は各国のマクロ経済パフォーマンスを理解するうえで、より有効である。もし相対価格が国際貿易を調整しないならば、あるいは貿易フローが価格変化に対して相対的に反応しないならば、産出量と成長が輸入と輸出を調整することになる。しないならば、の後の関係は、輸入と輸出、国際貿易からの収支制約が産出量と成長を調整する、と逆にならぬいか。

Nureldin-Hussain(1999) アフリカとアジアにおける Thirlwall の法則の国際比較 アジアでは 5.91%であるが、アフリカでは 2.45%という輸出増加率の差 生産構造と輸出需要の所得弾力性の違いが、各国の成長率に影響を与えることを示唆

UNCTAD(2002) アフリカの一次産品、工業製品およびサービス輸出国との間には成長率と貧困削減率において大きな違いがある。一次産品輸出国では成長率が低く、貧困削減率が低いのにに対して、工業製品輸出国は成長率が高く、貧困削減率が高い。

近年の Thirlwall の法則の実証分析からは、資本を入れたモデルが実証的により強い支持 貿易に関する国際収支制約以外にも、途上国には債務借入れも大きな制約 借入れの利子返済が国際収支制約に大きな制約を与え、当該途上国は低い成長率

Santos and Thirlwall(2004)は、貿易自由化による途上国の輸出入の変化を検証。 各国の特性に合わせた自由化が肝要であると主張

6、結論

- ・ PRGFの実態は構造調整 + 貧困対策支出である。
- ・ PRGFは成長のために短期的な資本収支改善を目指しており、低所得国の国内への影響が非常に大きく、貧困層への影響が懸念される。
- ・ 対象国の多くは国内の成長要因を欠いていて、国内からの努力だけでは、開発を促進する取り組みは困難である。
- ・ Thirlwall の法則では、資本収支制約が成長に制約要因となっている
- ・ 貧困が蔓延する国々の特徴
 - 経済全体に占める貿易依存度が高い、国内の資金流動性は貿易と資本の流れをあわせた国際収支に大きな影響、
 - 国際収支がその国の成長、国内市場への変化に与える影響は無視できない
- ・ PRGF が求める多くの妥当な国内政策や良好なガバナンスが存在したとしても、外国からの援助の不足や先進国における保護貿易政策からの悪影響を埋め合わせることはできない
- ・ これまでの努力に加えてさらなる債務救済、輸出能力形成や市場へのアクセスといった形での多岐に渡る国際的な支援が欠かせない

参考文献

- Berg, Andrew and Krueger, Anne O. (2003) 'Trade, Growth, and Poverty: A Selective Survey', *IMF Working Paper* No. 0330

- Bird Graham (2004) 'Growth, Poverty and the IMF', *Journal of International Development* Volume16, 621-636
- Davidson, P. (1994) *Post Keynesian Macroeconomic Theory*, Edward Elgar, London
- Dollar, D and A, Krray. (2002) 'Growth is Good for the Poor' *Journal of Economic Growth* Volume7 Issue3 Page 195-32
- Dollar, D and A, Krray. (2004) 'Trade, Growth, and Poverty'. *Economic Journal*. Volume114 Issue493 Page 22-28
- Easterly, W. ve R. Levine, 2002, "Tropics, Germs, and Craps: How Endowments Influence Economic Development", *mimeo*, Center for Global Development and Institute for International Economics.
- IMF (2002) *World Economic Outlook*. Washington, DC, International Monetary Fund, Washington
- Nureldin-Hussain, M. (1999) The Balance of Payments Constraint and Growth Rate Differences Among African and East Asian Economies, *African Development Review*, June
- Oxfam (2002) *The Trade Report: Rigged Rules and Double Standards*, OXFAM London
- Prebisch, R. (1950) *The economic development of latin america and its principal problems*. New York: United Nations Department of Social Affairs,
- Santos-Paulino, A and Thirlwall, A. P. (2004) 'The impact of trade liberalisation on exports, imports and the balance of payments of developing countries', *Economic Journal*; 2004 Volume114 Issue493 Page 50-23
- Thirlwall, A. P. (1979) 'The balance of payments constraint as an explanation of international growth rate differences', *Banca Nazionale del Lavoro Quarterly Review*, March.
- Thirlwall, A. P. (1997) 'Reflections on the concept of balance-of-payments-constrained growth' *Journal of Post Keynesian Economics*; Volume19 Issue3 P377-10
- Thirlwall, A. P. (2002) *The Nature of Economic Growth: An Alternative Framework for Understanding the Performance of Nations*, Edward Elgar, London
- Thirlwall, A. P. and Hussain, M. N. (1982) 'The balance of payments constraint, capital flows and growth rate differences between developing countries', *Oxford Economic Papers*, November.
- UNCTAD(2002a) *The Least Developed Countries Report 2002*, Geneva
- UNCTAD(2004) *The Least Developed Countries Report 2004*, Geneva
- 石川滋 (2002) 「貧困削減か成長促進か：国際的な援助政策の見直しと途上国」 『日本学士院紀要』第 56 巻 2 号、1 月
- 石川滋(2003) 「PRSP 体制の有効性について」 『国際協力研究』 Vol.19 No.1
- 大野敦 (2004) 『成長、不平等と貧困』 京都大学 Working Paper
- 佐野誠 (2005) 『市場原理主義を超える開発』 Forthcoming